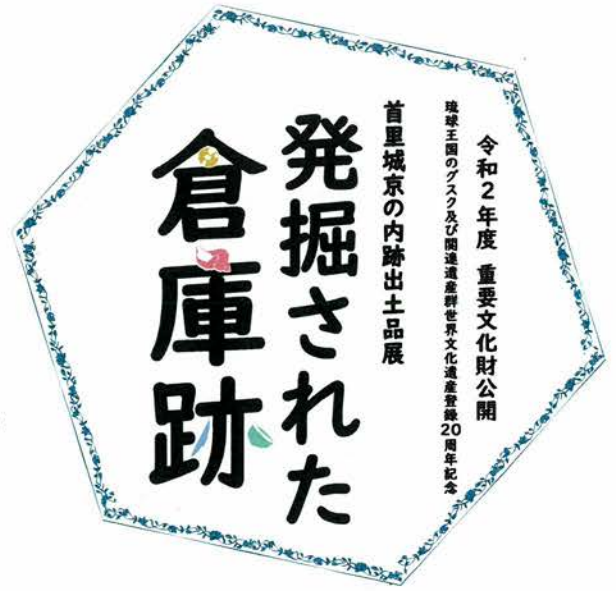




第 86 回 文化講座



・世界遺産登録 20 周年特別記念講演

「遺物から解明した龍柱の形態について」

講師：琉球大学名誉教授 西村 貞雄 氏

日時 令和 3 年 2 月 14 日（日） 14:00 ～ 16:00

場所 沖縄県立埋蔵文化財センター（研修室）

遺物から解明した龍柱の形態について

西村 貞雄

一般に龍柱と言えば柱にラセン状に巻き付いた龍の柱を連想する。柱としての機能は、屋根を支える位置づけであり、それに守護性をもたせるために昇龍、降龍を配置しているのが通例である。

しかし、首里城正殿の龍柱では、屋根を支える等の通常の機能との違いが見られる。また正殿正面の階段や玉座の左右から王や王宮を見守る守護の意味が見られる。

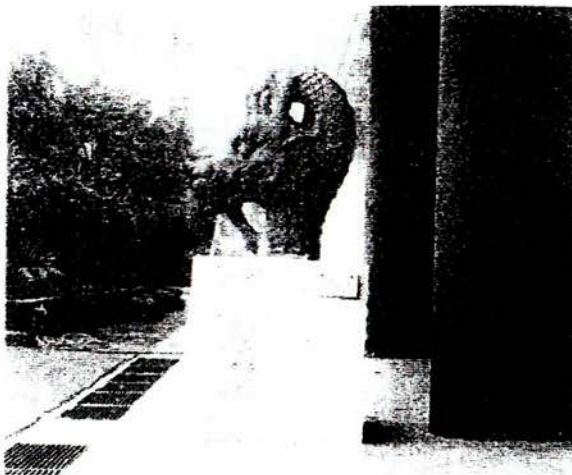
では、首里城正殿の龍柱の形態は、どのようなものであるかを遺物から形態を解明した過程に基づいて述べる。



一般的に見られる、龍が柱にラセン状に巻いた
龍柱の事例

戦後の状況

首里城正殿の大龍柱は阿形（口を開けた形）・吡形（口を閉じた形）の二体で一對をなしている。この大龍柱は明治時代に胴体中央部が破壊され、しかも戦前撮影された写真でも、胴体中央部が欠落して短くなった状態で限られた位置からの形態を示すだけである。また、去る大戦でも一層の破壊があつて、日本復帰前まで沖縄県立博物館正面玄関（首里にあつた当時）入口に大龍柱吡形頭部（遺物）のみが台石に設置されていた。阿形の頭部は形がとどめない状態の残欠が残されていた。



沖縄県立博物館正面玄関前に据え付け
られている大龍柱吡形頭部



沖縄戦で破壊された
大龍柱阿形の遺物

日本復帰後

沖縄県の復帰 20 周年記念行事として首里城正殿の復元が取り組まれた。その予備設計段階で大龍柱を復元するにあたり破損する以前の龍柱の姿態を 1712 年の首里城正殿再建時に求めることとし、縮尺 1/5 で復元を試みた。

筆者は、この仕事に携わる以前、やはり首里城正殿大龍柱のミニチュアでの復元をしたことがあった（明治橋の親柱）。その時は戦前までに無くなっていた欠落破損部分は復元せず、戦前の写真に見られる範囲内での復元作業で、期間も短く、しかもこれほど大掛かりな仕事ではなかった為、筆者の持ち合わせていた、鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』（岩波書店）、『写真集 沖縄』（那覇出版社）、田辺泰『琉球建築』（座右宝刊行会）、坂本万七遺作写真集『沖縄・昭和 10 年代』（新星図書出版）と、文化庁が昭和 8 年頃作成した『国宝建造物沖縄神社拝殿図』（以下『拝殿図』という）の大龍柱についての図面などを参考にして進めた。



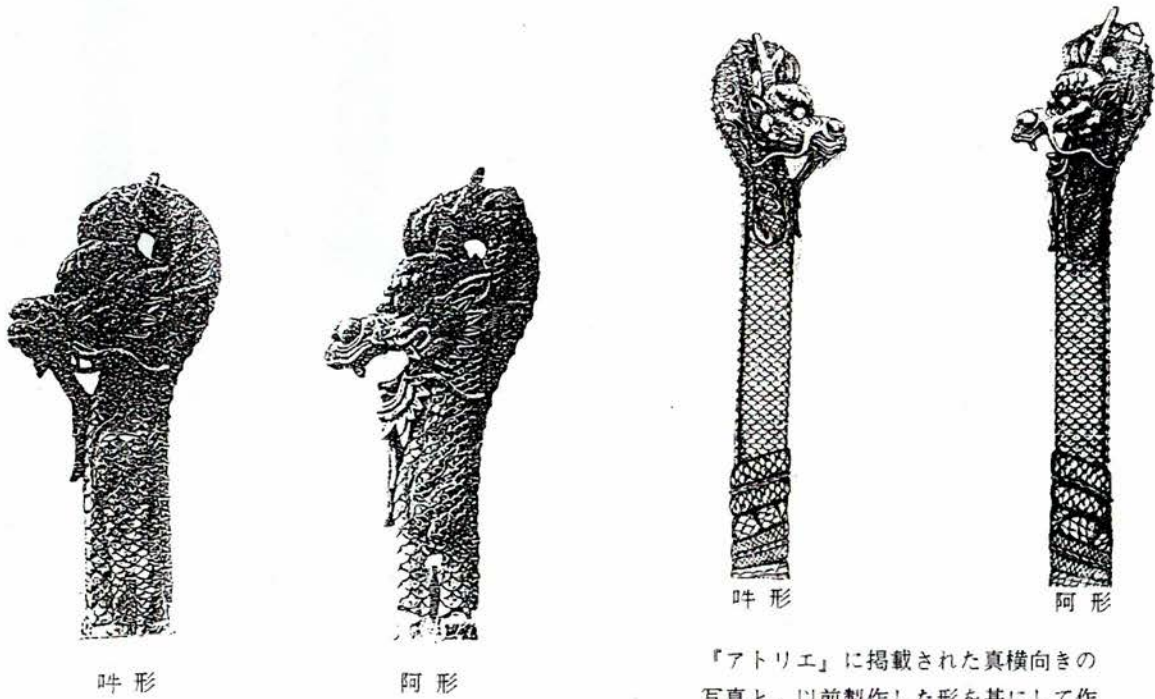
持ち合わせの写真集と「拝殿図」を基にして復元製作したミニチュア（明治橋）

大龍柱復元の手掛かり

これらの参考資料の写真を拡大鏡等を用いて分析することから始めたが、龍柱を撮った写真は少なく、撮影されている角度も似通っている為、形を追求するのに困難をきたした箇所が多かった。

写真分析をある程度した時点で、沖縄県立博物館正面玄関前（当時）に据えられている大龍柱卍形頭部（遺物）の部位を計測し、拝殿図の図面との比較をしながら製作に入った。拝殿図の大龍柱で特に参考にしたのは前脚部の火焰と胴体下部である。これは胴体下部と尾を巻き付けた部分は、写真からは判断が付かなかった為と真横向きの写真が資料には無かった為である。

1768年（乾隆33）に作成された『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（沖縄県立芸術大学蔵）及び昭和2年3月発行『アトリエ』第四巻、第三号に掲載されている比嘉朝健の龍柱についての論文『琉球石彫刻龍柱』に高さ等についての記述があり、これらを基にして高さ3.106mmとすることにし、縮尺1/5の復元模型の製作に入る。



叶形

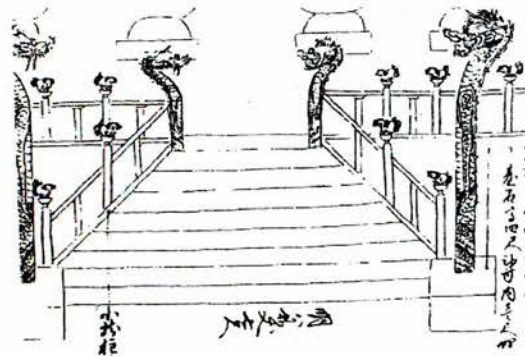
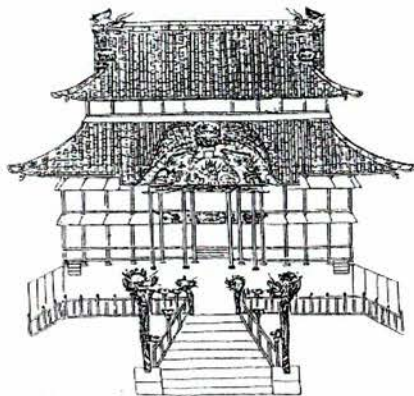
阿形

叶形

阿形

『アトリエ』掲載写真

『アトリエ』に掲載された真横向きの写真と、以前製作した形を基にして作成した姿図



1768年（尚穆17）『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（略して寸法記）
（沖縄県立芸術大学蔵）

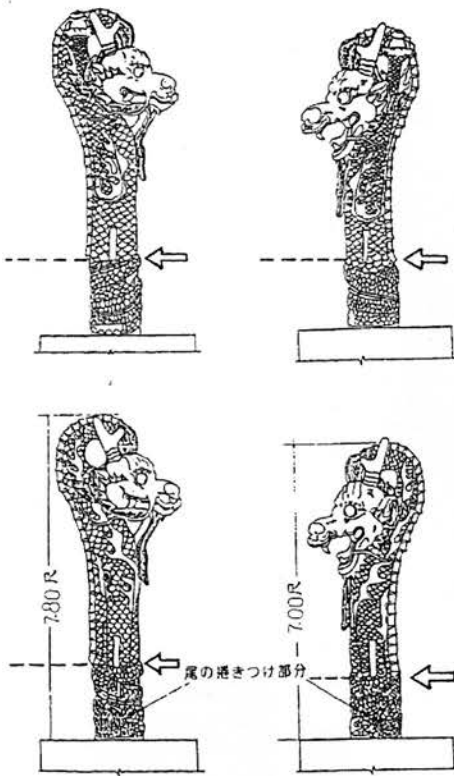
大龍柱・縮尺 1/5 復元

立体像を製作するには平面的な写真等では角度による狂いが生じる為、粘土を使い立体的にこれらの資料を基に再現してみることが必要であり、実際に目で見ただけでは気付かないことが発見された。

以下、その概要を図や写真等で復元過程を示すことにする。

『拝殿図』では、次の事柄が判明した

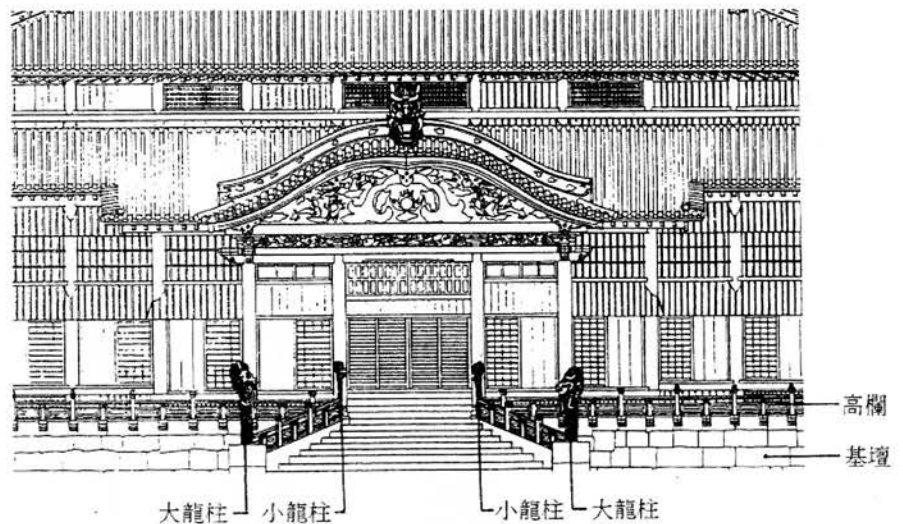
- ・ 写真と違い、胴体が太い。
- ・ 細部を写真と照らし合わせると、ウロコの大きさ位置が違い、大雑把である。
- ・ 左右の側面図の描き方において顔面と胴体の方向が違う。
- ・ 胴体継目から下の尾の巻き付けられた部分がそれぞれ逆に描かれている。



前脚は上下に配置されている。
上にあげている脚は宝珠を握り、
下に向けた脚は途中破損欠落した
状態になっている。

---は、継ぎ目を示し、上は胴
体部、下は尾の巻きつけられた
部分

「拝殿図」

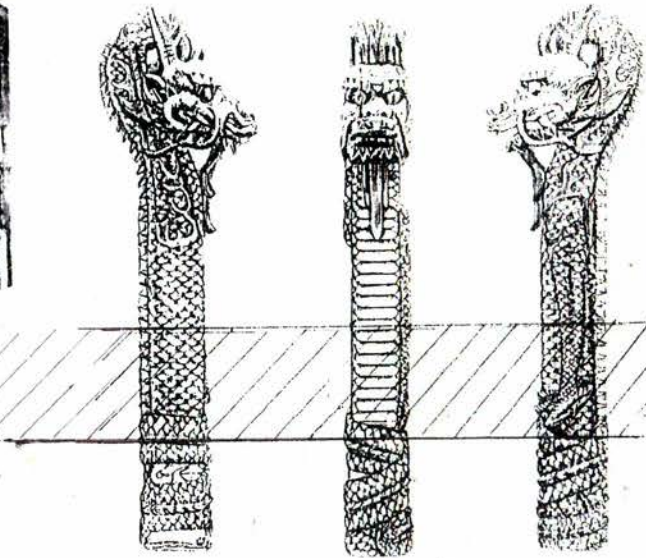


「拝殿図」(昭和8年頃)

明治時代後半の首里城正殿
 の写真 大龍柱は正面向き
 であるが、短くなっている。

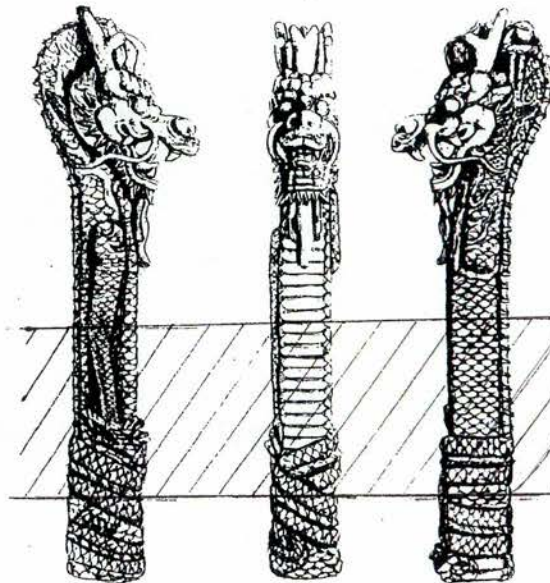


阿形



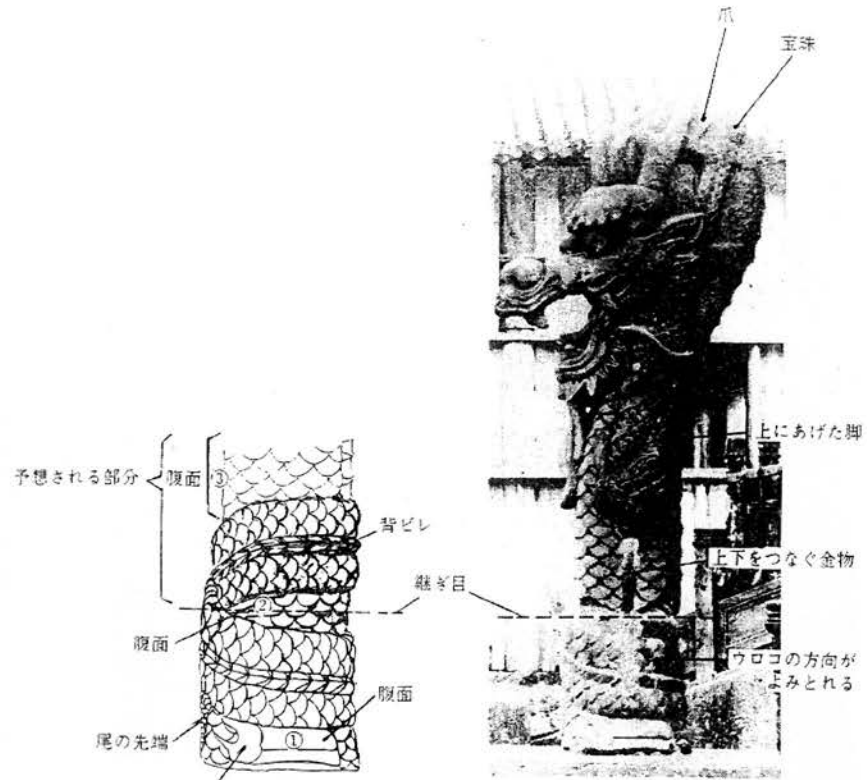
斜線の部分は、欠落破損した箇所 正面向きの大龍柱阿形・吽形

胴体中央部が欠落破損し、短くなった状態

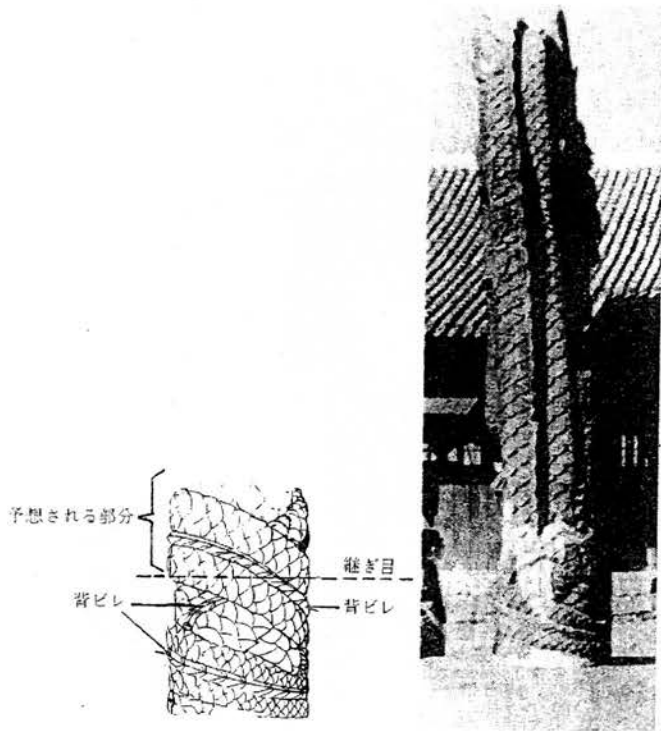


阿形

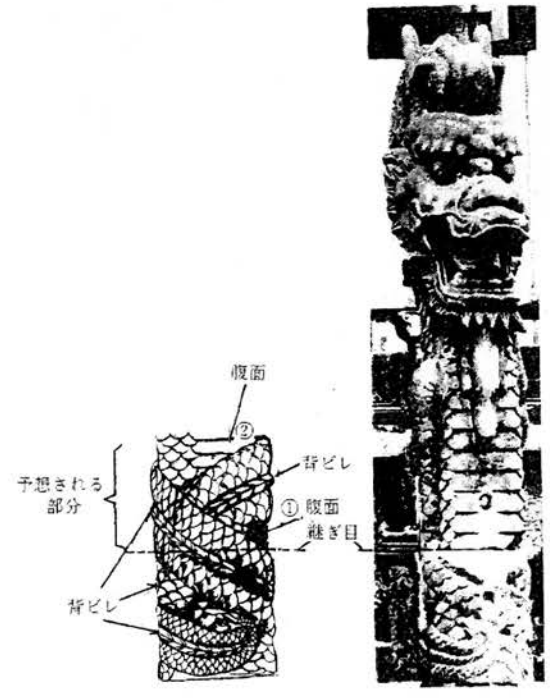
・大龍柱阿形



継ぎ目は、漆喰のようなもので修正されており、ウロコの形と腹面の形の区別がつきにくい箇所があった。後面の流れが①②③と流れていく形がよみとれた。



数少ない写真の中で、唯一の後面写真である。当初継ぎ目から下の尾を捲きつけた部分は後面であると判断したが、ウロコの流れを検討しながら立位像を幾度か試作した結果、継ぎ目より下の捲きつけ部分は阿形の右側面であることがわかった。

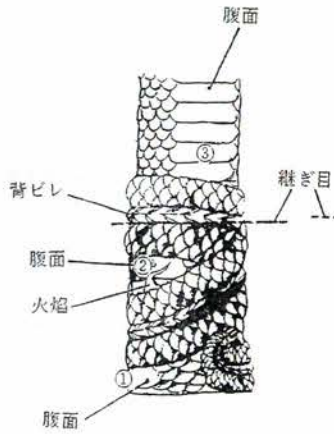
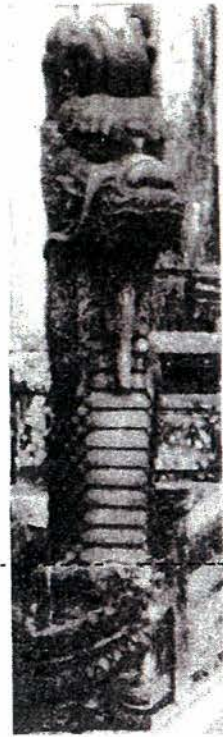


ウロコには、大小があり、胴体部のウロコは大きく均一なものである。胴体部のウロコは尾の先端にいくにしたがって小さくなってゆき、大きなウロコより小さなウロコに動きがあるように見えた。腹面も①②とつながれていく事が分かった。

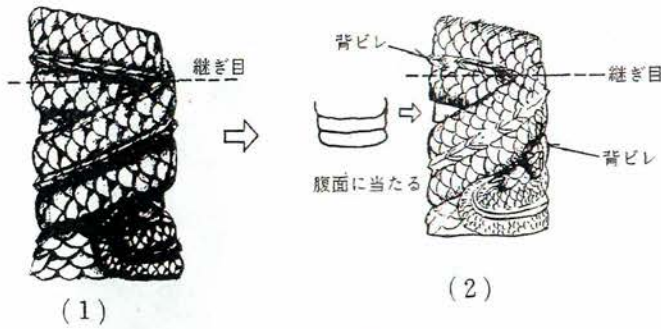
・大龍柱吽形



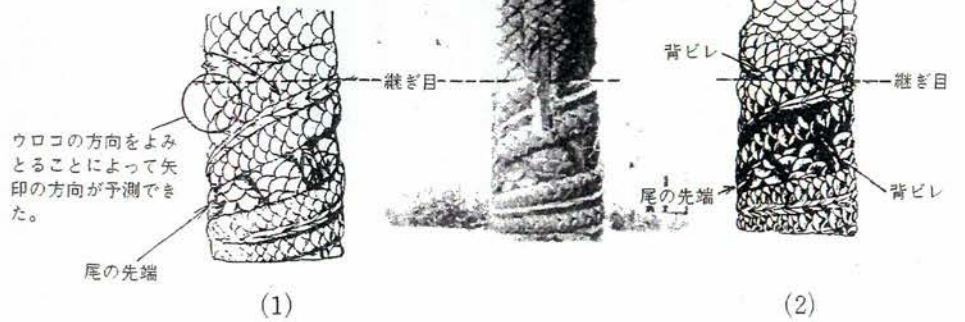
継ぎ目
尾の先端
巻きつけの流れ



ウロコの流れで形を捉えていく中で欠けた部分もあり、何回も検討を加えた結果、腹面が斜めに流れて垂直な胴体部につながっていく経過を得た。その結果、腹面の①②③とつながっていく。



当初、上の写真を(1)のように解釈したが、立体像にしていくなしてはたがってつじつまが合わなくなり、考察した結果(2)のようになる。



当初(1)図のように解釈していたが、立体像をつくり検討していくうちに矢印のような尾の流れであることがわかり、(2)図のようになる。…線より上は予想されるウロコの流れで形づくる。

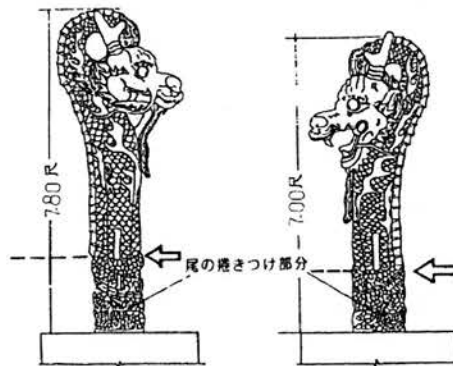
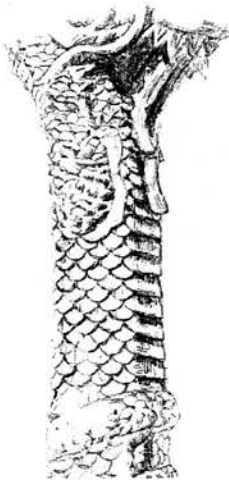
昭和8年頃の写真
首里城正殿解体修理後に
沖縄神社拝殿になる



神社になり、狛犬同様に
短い大龍柱を向い合わせた形



正面向きの阿吽形を向き合わす形
にする為に、明治中期頃から短く
なった大龍柱の継ぎ目に、手を加
えた跡がある。



「拝殿図」

明治中期頃に胴体部分が約1300mm欠落破損して短くなった状態で、大龍柱を繋いだのが継ぎ目の箇所である。その巻き付け部分の尾の先端が正面に位置付けられていたのが、昭和の解体修理にともなって尾の先端部分も真横に変更され継ぎ目の部分に誤りが生じた。



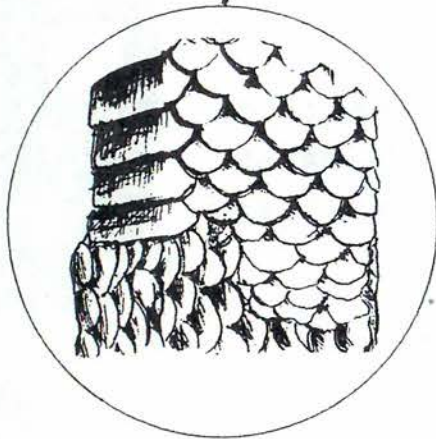
阿形A図



阿形B図



田辺泰撮影
昭和の解体修理後の向き合う形
の大龍柱阿形である。



大幅に無くなった胴体部と
下部の巻き付け部分との継
ぎ目には不自然な処理がさ
れている。

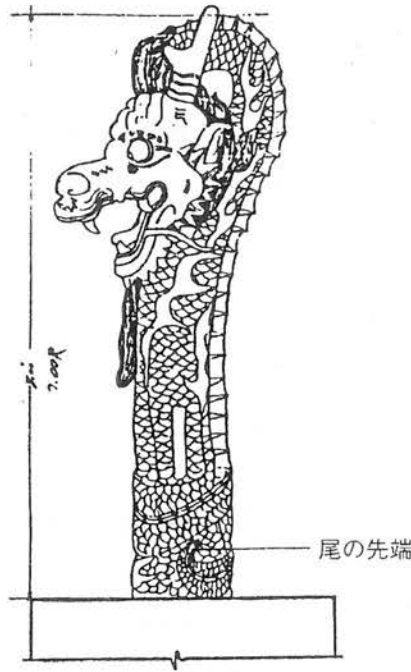
大龍柱阿形のA図は、縮尺1/5の立体像として復元する前の筆者が作成した姿図である。その下部の巻き付け部分（○印）は、形が判断できないため、昨形の形と対応するように考えた。昭和の解体修理後の「拝殿図」と田辺泰撮影（上掲の写真）の大龍柱・下部の巻き付け部分では形に食い違いがあり、混乱した結果といえる。

阿形B図は、筆者が縮尺1/5の立体像として復元した像を元に作成した図である。A図の下部巻き付け部分の形を、B図の下部の形に変えたが、これは明治・大正・昭和に撮影された写真や遺物、絵図等を検討し、前後左右から形を追究して立体像の形に究明した結果、復元できたものである。

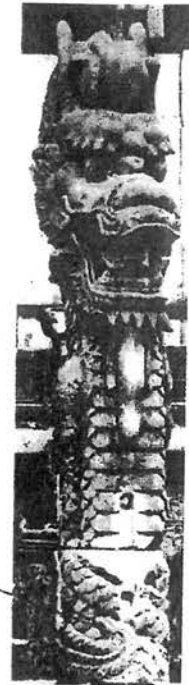
継ぎ目の処理が誤っていることによって、復元作業の際、大分手間取った箇所である。



大正11年頃
鎌倉芳太郎撮影



「拝殿図」より
昭和8年頃作成



大正11年頃
鎌倉芳太郎撮影

大正11年頃、鎌倉芳太郎撮影の大龍柱は、胴体部と下部の巻き付け部分との継ぎ目に補修された痕跡があつて痛々しい。

大幅に無くなった胴体部からは、すでに龍柱の形態がどのような形であつたかも判断できなくなっている。この様な状態の中で、正面向きだつた大龍柱を昭和の解体修理時に向き合う形に変えたことによって、余計に混乱を招く結果をつくつた。その一つの証拠として、大正11年頃に撮影された大龍柱は、下部の巻き付け部分の尾の先端が顔面と同じ面に方向づけられているが、「拝殿図」の絵では真横に位置づけられている。



「拝殿図」より

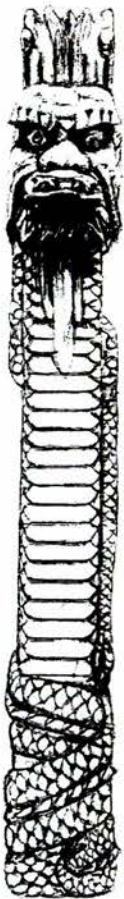
「拝殿図」の大龍柱のスケッチでは、巻き付け部分の尾の先端が真横に位置付けられた形になっている。

明治橋の大龍柱親柱は、製作の段階では正しい尾の位置を知らなかったため横についている。

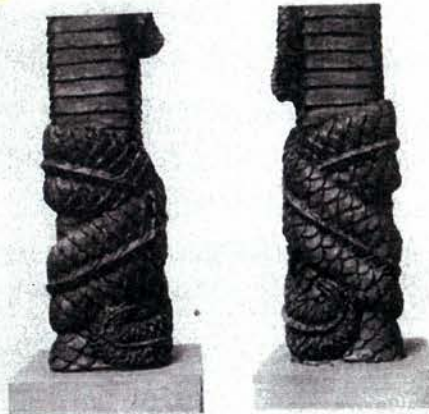
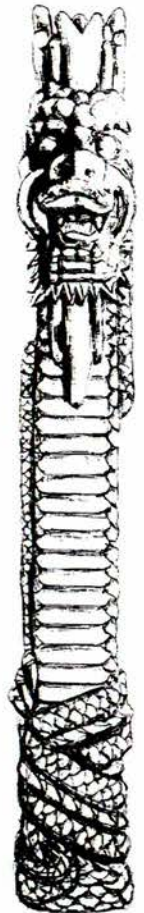
明治橋の親柱 龍柱



大龍柱の下部、巻きつけ部分を解明した結果、尾の先端が正面に位置付けられることを解明した図解である。



この大龍柱の阿吽の姿図では、巻きつけ部分の尾の先端が正面に向けられると、阿吽の頭部も正面に向けられねばならないが、この姿図では、大龍柱の形態を分かりやすくする為に、頭部を横向きに描いている。



大龍柱吽形 下部巻きつけ部分を正面左斜めより復元した図

大龍柱阿形 下部巻きつけ部分を正面左斜めより復元した図



吽形



阿形

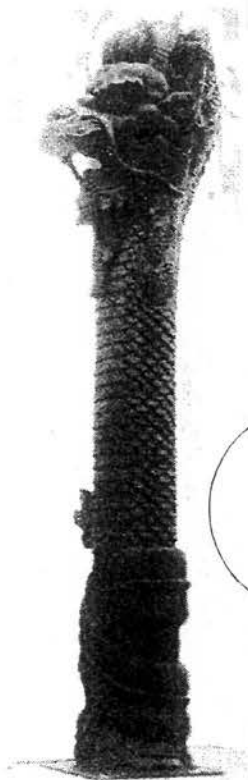
大龍柱の姿態の図解



叶形頭部
宝珠を持った掌。
(県立博物館に現存)

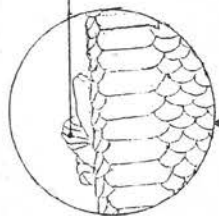


同左。斜め上から撮る。
宝珠と4本の爪がわかる。

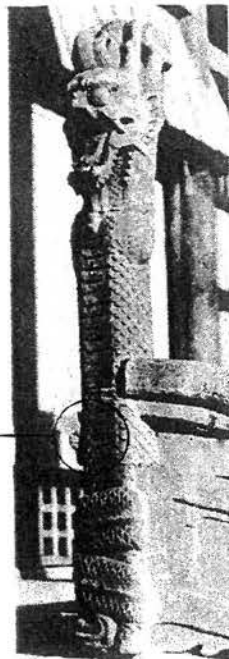


右の小龍柱阿形を参考にした
大龍柱阿形の同アングルで撮
影した写真
(油土で製作復元する)

特徴がつかめる



拡大

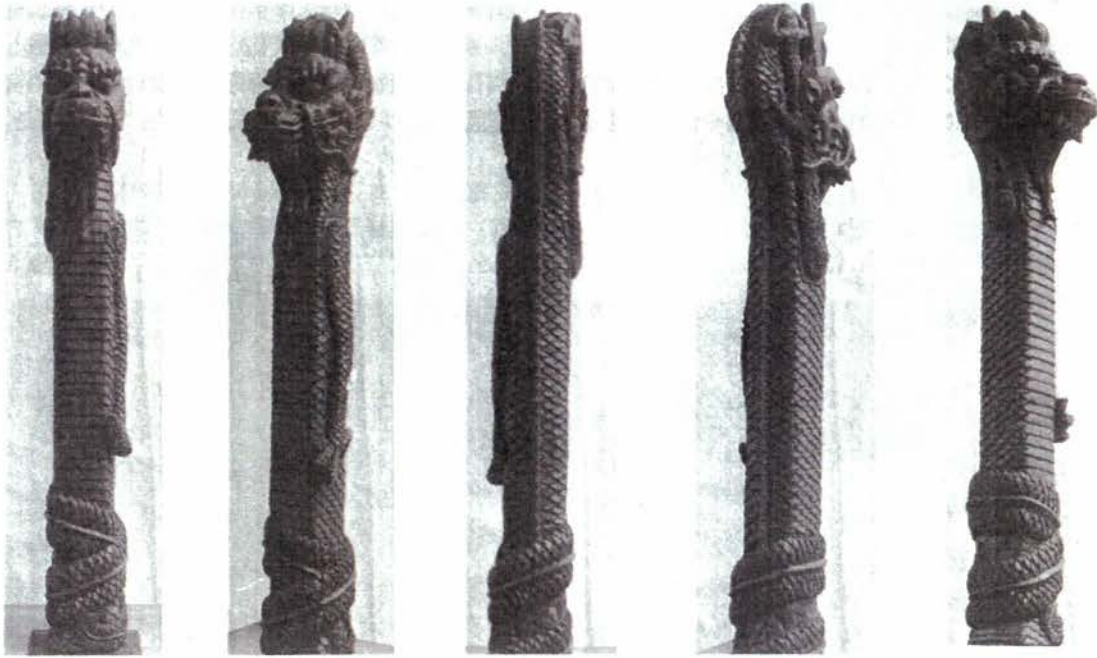


爪を構えた小龍柱
(阿形)

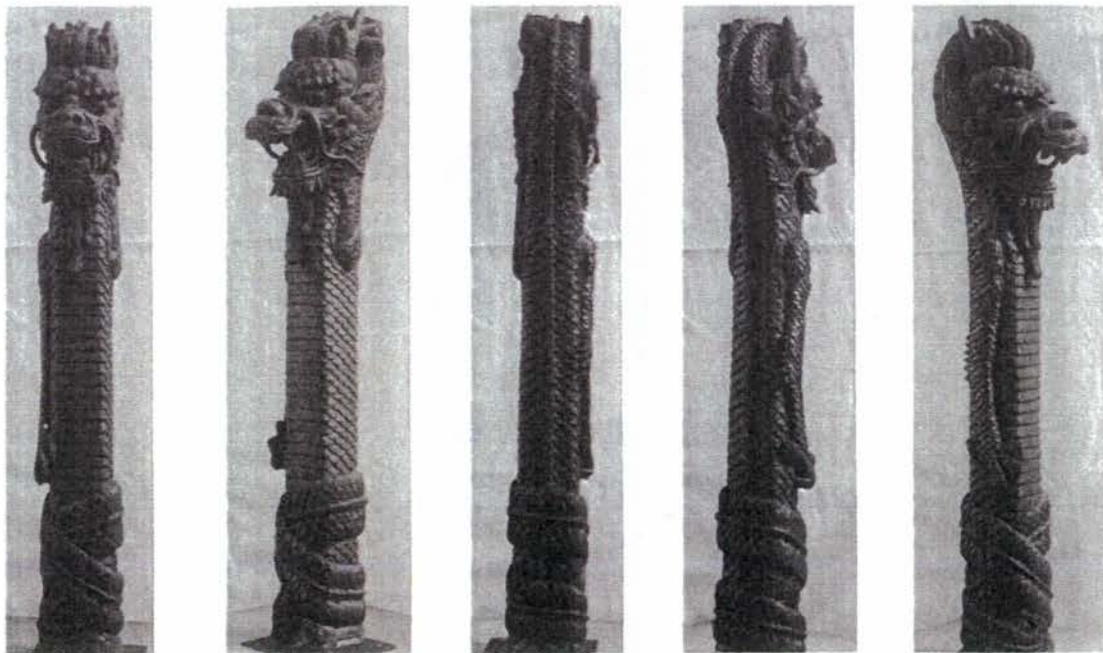
写真の掌を透写台を使って
反転させ、スケッチしたも
のを上下を逆にして参考と
する。

大龍柱の前脚、下に構えた脚を解明するのに上に掲げた宝珠
を握った形の脚を参考にして製作した過程である。

大龍柱 阿形・吡形を縮尺 1/5 で、復元製作した完成立体像である



首里城正殿前大龍柱吡形（縮尺 $\frac{1}{5}$ ）



首里城正殿前大龍柱阿形（縮尺 $\frac{1}{5}$ ）

この形を追求して復元するには、かなりの時間がかかった。限られた写真であること、しかも龍柱が欠落破損しているため、龍の形態解釈に手間ど

り、鱗、背鳍を一つ一つ確認しながら立体像にしたのである。

大龍柱 阿形・吽形の形態を解明（縮尺 1/5）したことを基本にして、原寸大で遺物を組み合わせて復元することによって、細部の形状や新しく発見することがあり、より充実した形で大龍柱の原形に近づいたと思われる。その過程を画像でもって説明することにする。

結び

大龍柱が他に例のない高さであることは、正殿の建物と御庭とを結ぶ中で、天に向けての龍柱の宇宙軸に合わせての関連性があると感じられる。

首里城正殿の龍柱の形態を知ることによって正殿の龍の仕組みが見えてくる。

正殿の龍柱について知識が無く表面的に見れば、単なる龍の柱としか判断しないと思われる。

龍柱の形態を知ることによって、この龍柱にはいろんな要素が内包されていることが理解される。しかし、この龍柱に対する知識が無く、感覚的に思いつきの発言をする傾向がある。

龍柱を復元することによって次の事柄が認識される。

首里城正殿の龍、獅子像、禪宗系の意匠等は、決して華美な表現はとっていない。それには、龍柱に代表されるように抑制された表現と見立ての要素がある。

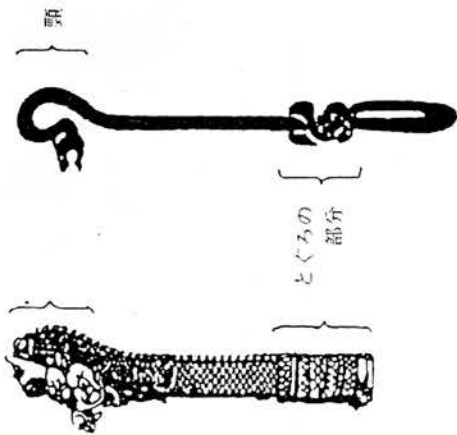
復元を通して、首里王府は規模、財政、素材、技術、意匠、環境、人口等を諸外国の宮殿と比較すると、可成り制約された中から編出されたものであり、その内容には首里王府ならではの見出せない統一感と美意識があると思われる。

遺物から解明することは、その当時の形態を理解することに繋がると共に、その他、諸々の事柄も含めて波及効果があると思われる。

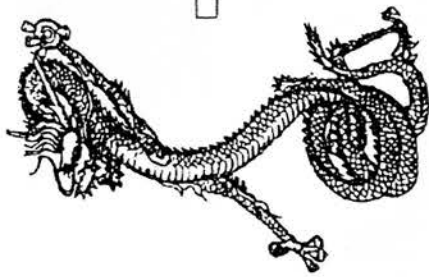
首里城正殿（百浦添御殿・唐破風）の変遷

- 1406年（思紹 1） 第一尚氏王朝樹立。
- 1420（“ 20） 首里城第一次拡張工事。
- 1477（尚真 1） 欽会門創建、首里城第二拡張工事。
- 1492（“ 16） 円覚寺創建。
- 1501（“ 25） 玉陵造営。
- 1502（“ 26） 円鑑池・経堂建立。
- 1506（“ 30） 北殿創建。
- 1509（“ 33） 百浦添之欄干之銘、正殿基壇の高欄に刻む。龍柱建立。
- 1519（“ 43） 園比屋武御嶽・弁ヶ嶽造営。
- 1529（尚清 3） 守礼門創建。
- 1546（“ 20） 東南側城壁増築、継世門建立。
- 1547（“ 21） 大美御殿創建。
- 1562（尚元 7） 奉神門に石高欄取付。
- 1609（尚寧 21） 薩摩侵攻。
- 1621（尚豊 1） 南殿創建（1627年竣工）。
- 1660（尚質 13） 正殿炎上。王府を大美御殿に移す。財政事情悪化。
- 1661（“ 14） 慈恩寺の橋を龍潭に移設（世持橋）。
- 1667（“ 20） 儀保為宜（蘇巨昌）大龍柱製作。
- 1671（尚貞 3） 正殿再建・板葺屋根を瓦葺屋根にする。
- 1677（“ 9） 東苑（御茶屋御殿）創建。
- 1682（“ 14） 平田典通（宿藍田）五彩焼瓦による龍頭棟飾（龍頭彫甍）を設置。
- 1709（“ 41） 正殿・南殿・北殿全焼す。謝敷宗達・大龍柱製作。
- 1712（尚益 3） 正殿再建（1715に竣工）。
- 1721（尚敬 9） 円覚寺・大殿（龍淵殿）焼失、再建。
- 1729（“ 17） 正殿重修、宝座（御差床）を中央に移し、「唐破風」と呼ぶ。
- 1744（“ 32） 間得大君御殿焼失。
- 1759（乾隆 24） 「惠姓家譜」田里里之子親雲上による「勅使様より龍桶に御建立の碑文の根留ならびに百浦添真正面の龍柱修補等相調」の件。
- 1760（尚穆 9） 大地震・城壁57カ所損壊。
- （乾隆 25）
- 1768（尚穆 17） 「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」。
- 1803（尚成 1） 間得大君御殿に鐘撞堂、西御番所建立。
- 1811（尚景 8） 正殿重修。
- 1837（尚育 3） 文廟（孔子廟）創建。
- 1846（“ 12） 正殿重修。

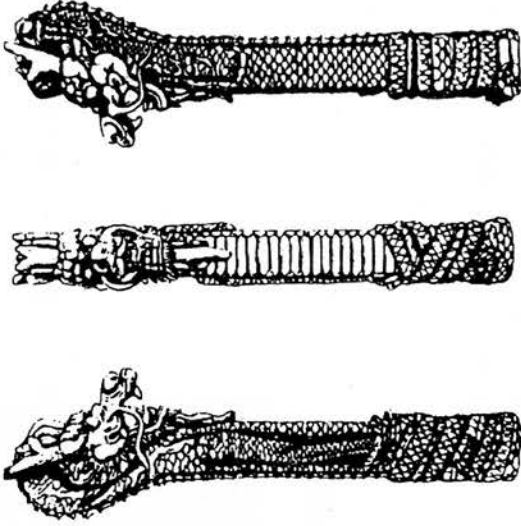
- 1853（尚泰 6） ベリー提督・首里城訪問。
- 1872（“ 25） 明治政府「琉球藩」とする措置を言い渡す。
- 1875（“ 28） 内務大臣松田道之、明治政府の方針を伝える。
- 1877（“ 30） レベルテガットの写真を元にブイヤールが下絵を描いた、コールによる首里城正殿の木版画。
- 1879（“ 32） 首里城明け渡し（琉球処分）、1896年まで熊本鎮台沖繩分遣隊の駐屯所に転用。
- （明治 12）
- 1881（明治 14） 上杉県令…大きな口を開け、目が…と、当時の龍柱が正面向きであることを記述としてある。
- 1894（“ 27） 仲宗根真補筆「首里旧城の図」、龍柱・欽会門の獅子像ともに向き合う形で描かれている。同時期の伊藤勝一資料の写真と比較すると、欽会門の門衛舎、ガス灯、「熊本鎮台分遣隊…」の看板は一致するが、写真では獅子像、龍柱は正面向きである。従って絵図の描き方が描きやすい方法をとっている事が証明できる。
- 1908（明治 41） 中山門、老朽化のため売却。
- 1923（大正 12） 首里市、老朽化の著しい正殿を解体することを議決する。「龍頭棟飾」を壊している際、鎌倉芳太郎、伊東忠太博士の計らいで中止される。
- 1924（“ 13） 正殿を史跡名勝天然記念物として指定、沖繩神社拝殿とする措置を講ずる。「龍頭棟飾」新たに造られる。
- 1925（“ 14） 正殿を特別保護建造物に指定。
- 1928（昭和 3） 正殿、解体修理始まる（昭和 8年竣工）。当時、工事に関わった文部省技官であった森政三（戦後の守礼之門を復元）が、大龍柱の向きについて「向きも明治の薩摩置置以降正面を向いていたが、解体修理を受けた際向き合って建てられた」と述べている（「写真集沖繩」p11、1984年 9月、那覇出版社）。
- 解体修理後に大龍柱が向き合っている写真を見た比嘉春潮が、伊東忠太にその事を話したところ「それは誤りだ、修復を監督した役人に話そう」と言ったが、第二次大戦勃発で実現できなかつたと述べている（「比嘉春潮全集 第五巻 首里城正殿の龍柱」1971年沖繩タイムス社）。
- 1929（“ 4） 正殿、国宝に指定。
- 1933（“ 8） 欽会門、瑞泉門、白銀門、守礼門、円覚寺、崇元寺、園比屋武御嶽石門など国宝に指定。
- 1936（“ 11） 北殿、沖繩郷土博物館となる。
- 1945（“ 20） 沖繩戦により首里城全壊。



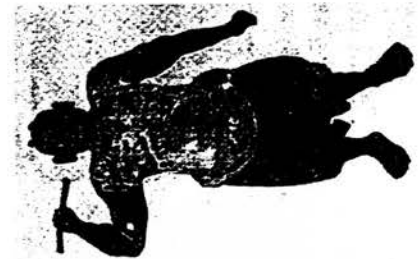
首里城正殿の龍柱は、龍が威嚇して構える態勢を柱として表している。とぐろ・鎌首・前脚がこの中にある。全体の姿図を右に示すが、詰っている後脚は造られず、暗示を与えている。



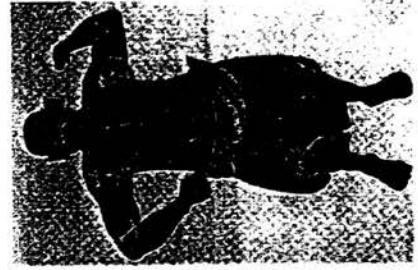
上の図は、とぐろを巻き、鎌首を持ち上げて、左の前脚を上下に構える態勢を取る龍である。この龍の姿態を柱としての機能の中に盛り込ませているのが右の図である。四角柱の胴体部に上下に前脚を配し、鎌首の構えも取り入れながら柱状にしている。これが首里城正殿の龍柱である。



柱としての機能をもたせた龍柱の右側面・正面・左側面・左側面像



八重山 桃林寺 仁王像 吽形

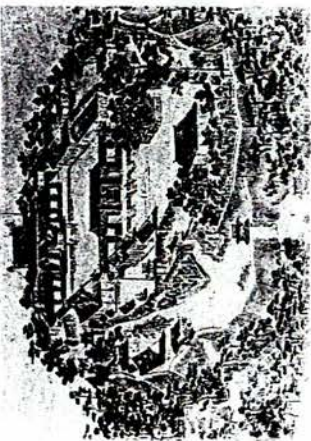


八重山 桃林寺 仁王像 阿形

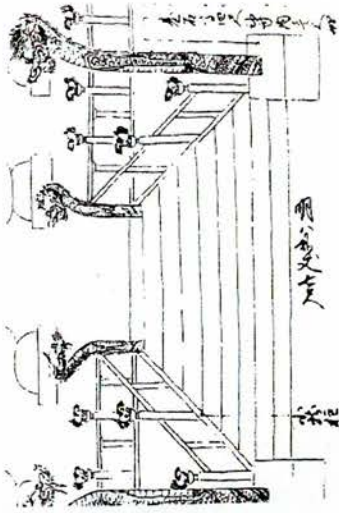
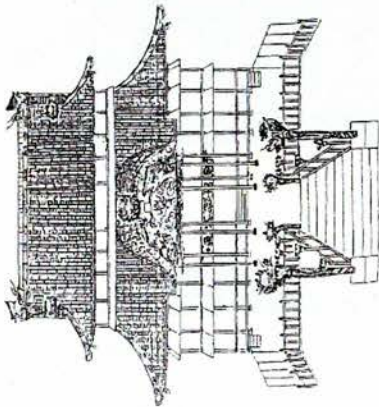
首里城正殿・大龍柱推移

1760年(尚稷9)大地震(城壁57カ所損壊)大龍柱と欄干にも影響を受けた可能性あり

首里城鳥瞰図 首里城全景の絵図

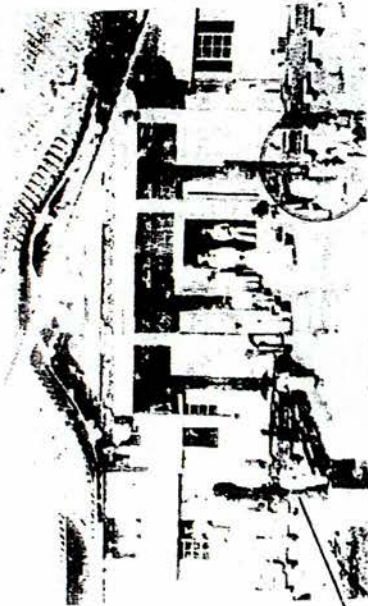


「首里城鳥瞰図」首里城全景の絵図(絵図の中でも古い)



1879年(明治12)首里城明け渡し(琉球処分)

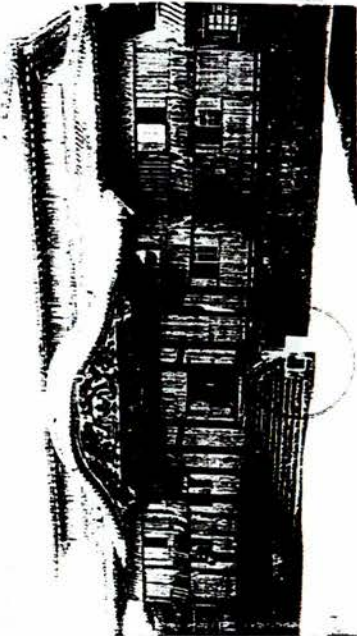
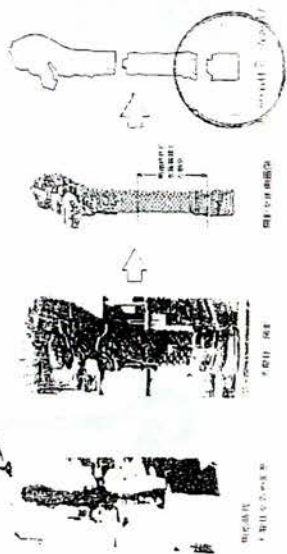
1768年(尚穆17)『百浦添御殿普請付御絵材木寸法記』(略して寸法記)
(沖縄県立芸術大学蔵)



1879年(明治12)～1896年(29年)熊本鎮台沖繩分遣隊
首里城内に駐屯した頃の写真
(台石に建つ、全容の大龍柱・正面向き)

伊東勝一資料より

全容の大龍柱が短くなっていく経過



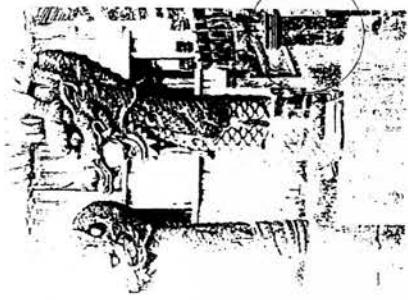
大龍柱の損壊事件、大龍柱・阿形は3つの石で繋いで製作された。その下部が残っている痕跡写真

明治中期頃の首里城正殿写真

沖縄県立公文書館蔵

1922年（大正11年頃・鎌倉芳太郎撮影）

損壊事件後の大龍柱・胴体中央部が欠損して短くなった
正面向きの大龍柱の写真と台石に隣接した親柱にある「ほぞ穴」



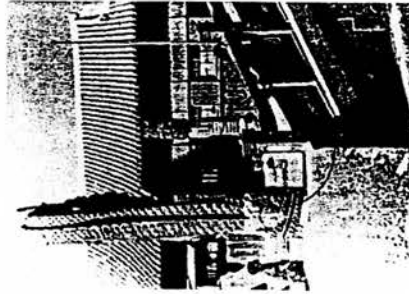
鎌倉芳太郎（大正11年頃）撮影



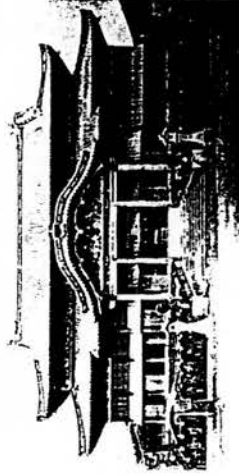
明治末期の首里城正殿

1935年（昭和10年頃・坂本万七撮影）

首里城正殿が「沖繩神社拝殿」になった写真。
短くなった大龍柱が神社の狛犬同様に向き合わせた写真。
台石と隣接する親柱の「ほぞ穴」

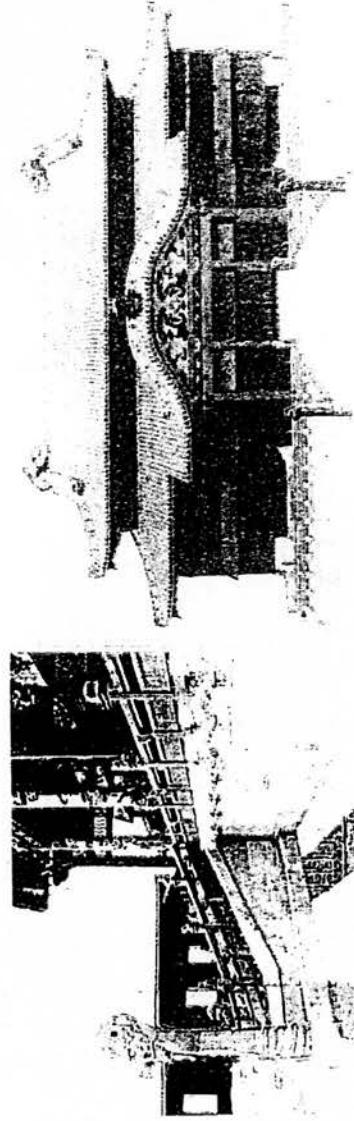


坂本万七撮影（昭和10年頃）



昭和の解体修理後に、沖繩神社拝殿として位置づけられた当時の首里城正殿

平成の復元後の修正



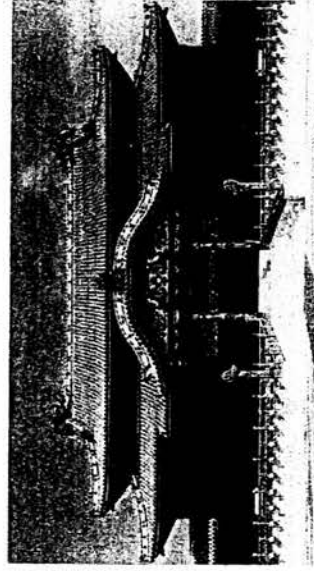
修正後の正殿階段の側面像

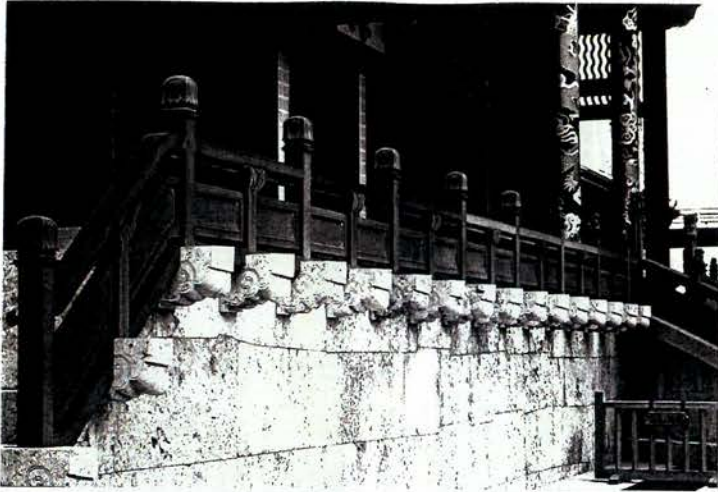
修正後の正殿階段の正面像

大龍柱の台石を取り除き、欄干に繋いだ大龍柱を正面向きに修正

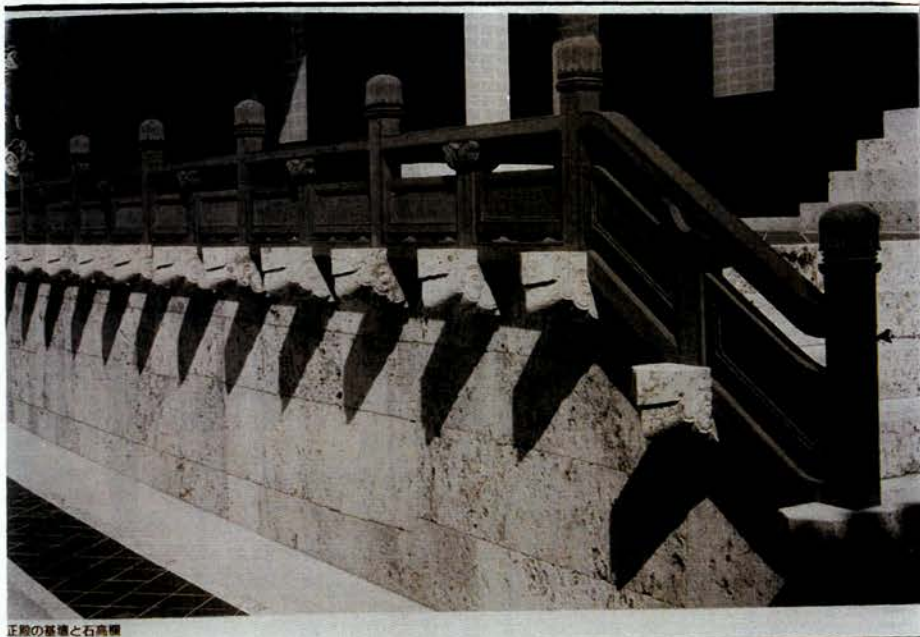
1992年（平成4年）

大龍柱の形態・全容解明し、
「寸法記」の絵図に合わせ大龍柱を向き合わせた形





正殿正面 左先端の高欄親柱（先端には「ほぞ穴」無し）



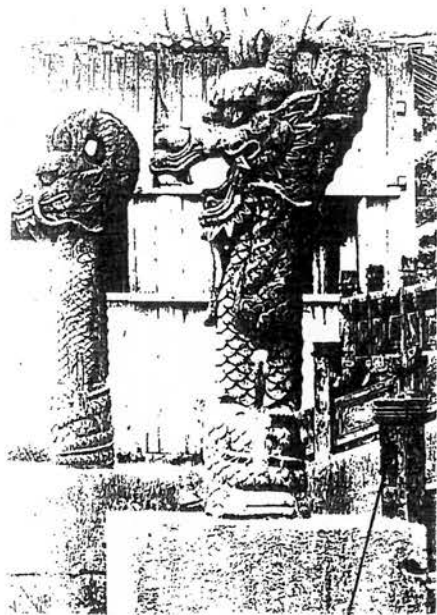
正殿の基礎と石高欄

正殿正面 右先端の高欄親柱（先端には「ほぞ穴」無し）



発掘された羽目石と親柱には「ほぞ穴」がある。正殿正面の左右の親柱とは異なり親柱には両サイドに「ほぞ穴」がある。末広がり階段・両袖の先端親柱ではないかと推測する。

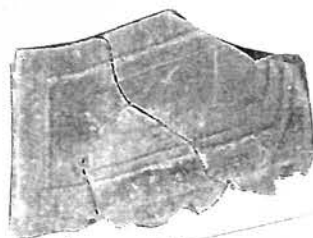
（沖縄県立埋蔵文化財センター蔵）



大正 11 年頃撮影 (鎌倉芳太郎)
大龍柱 (阿形)



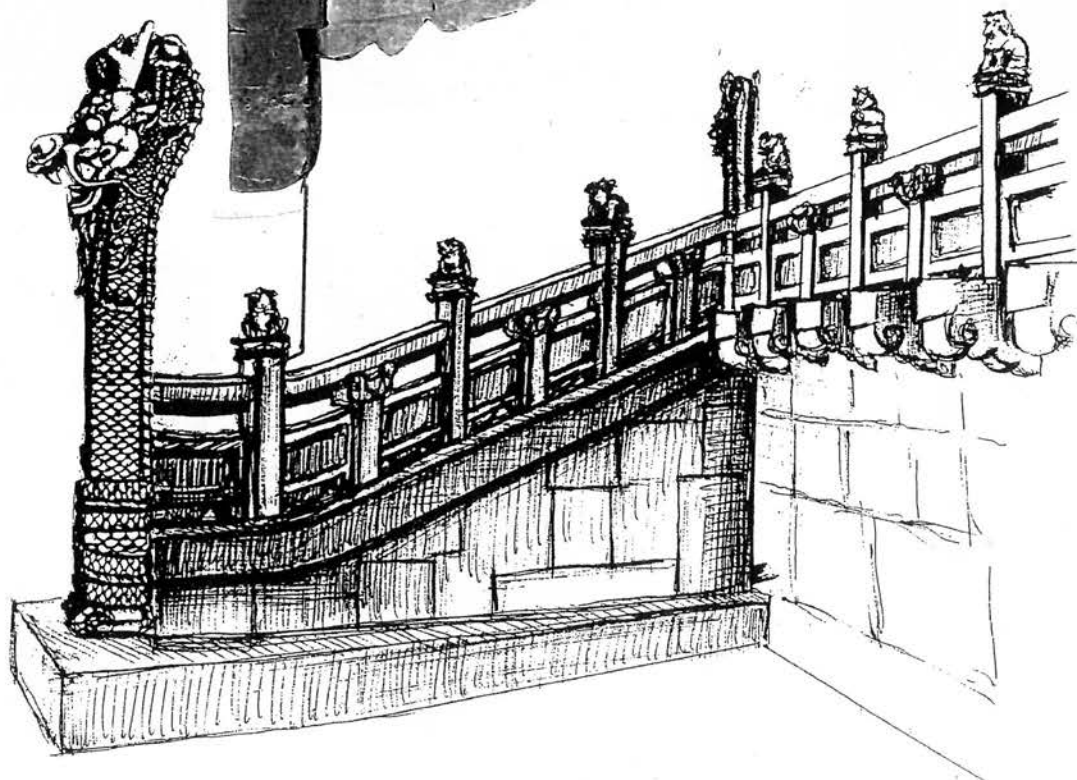
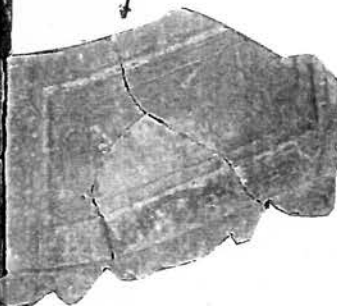
親柱の「ほぞ穴」
台石側から見た「ほぞ穴」



台石に隣接する親柱の「ほぞ穴」

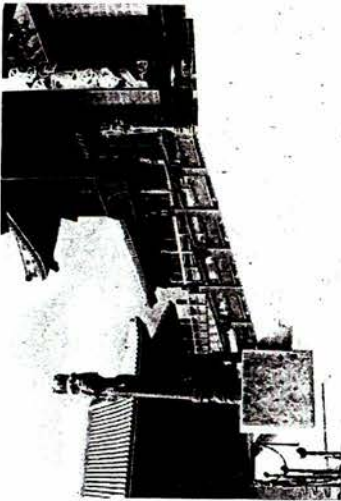
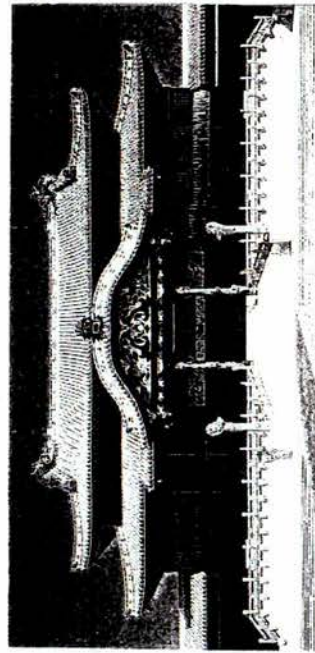


沖縄県立埋蔵文化財センター (収蔵)
親柱と羽目石 (遺物)
台石に隣接する親柱の「ほぞ穴」



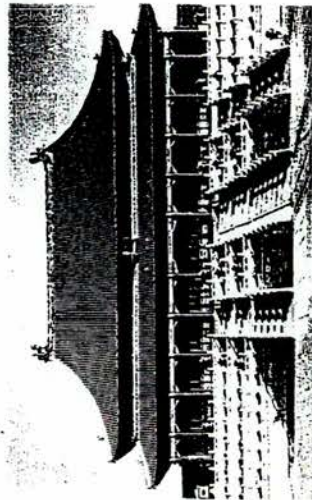
大龍柱・阿形を欄干に繋いだ想定図

首里城正殿 末広がりの階段と大龍柱との比較

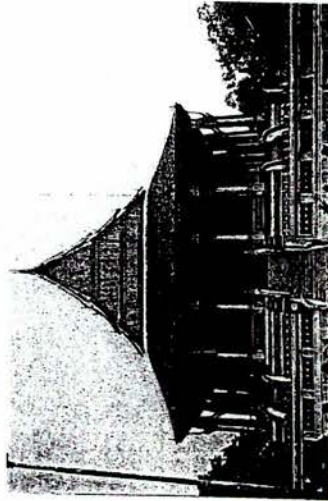


中国の紫禁城・ラオスの宮殿・韓国の勤政殿 階段先端部の比較

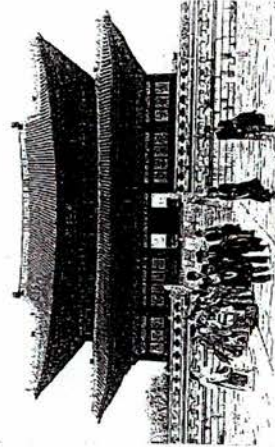
… 階段の両袖は平行に造られ、先端部にそれぞれ特徴がある …



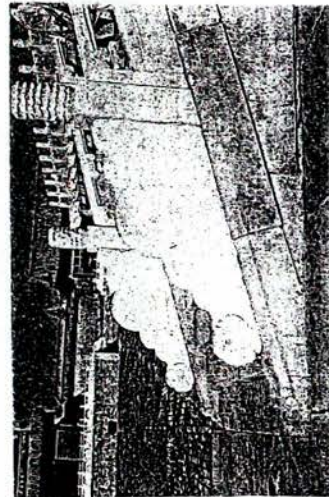
中国の紫禁城・太和殿



ラオスの宮殿

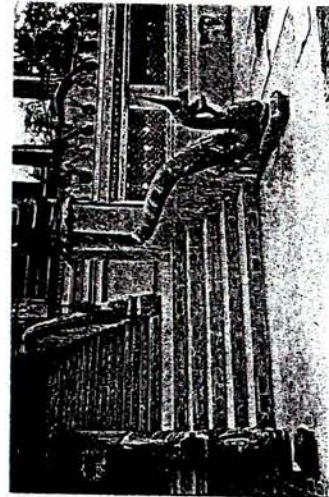


韓国の景福宮・勤政殿



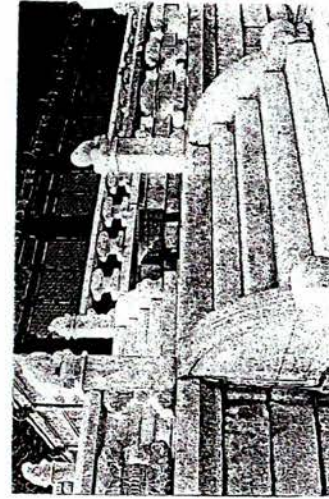
紫禁城の階段先端部

階段両袖には弧を描くようなリスミカルな曲線が連なり、先端は小さく丸められている



ラオスの宮殿の階段先端部

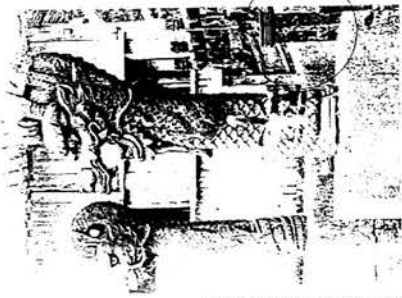
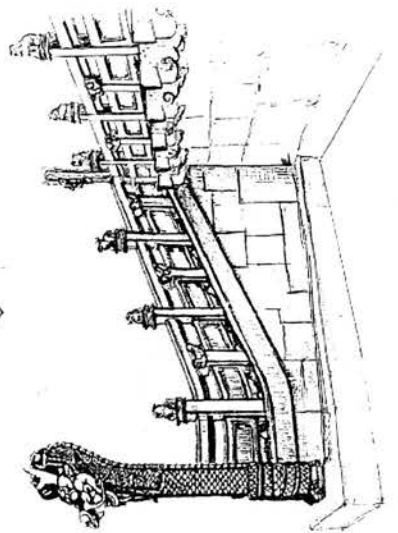
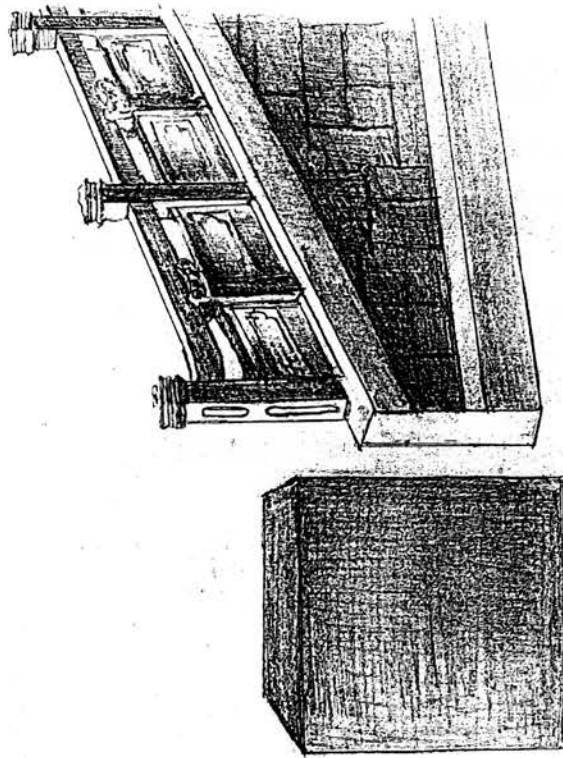
階段両袖は縦が揃っている形態をとっている。その先端部の扉は、両サイドとも口をあけて構えている



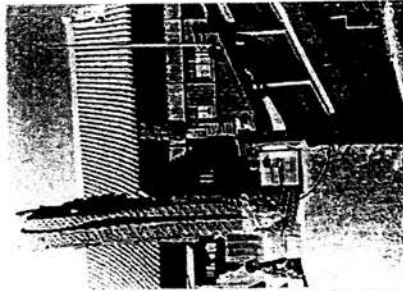
韓国の勤政殿の階段先端部

階段両袖には龍などの形はなく、先端は丸みを帯びて小さくまとめられている

大きな台石と大龍柱との関連性



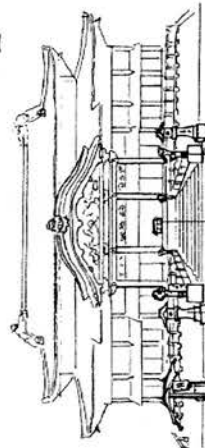
大龍柱の向き
大龍柱の向き
昭和10年頃の撮影



坂本方七郎撮影
昭和10年頃



上掲の写真には大龍柱の東方の柱に「ほぞ穴」が見える。大正時代の写真
の大龍柱は正面に向かっていて、昭和10年頃の写真では向き合う形にな
っている。昭和の写真は、解体修理後に沖繩神社拝殿として位置つけた後
の写真であり、「ほぞ穴」は埋められている。

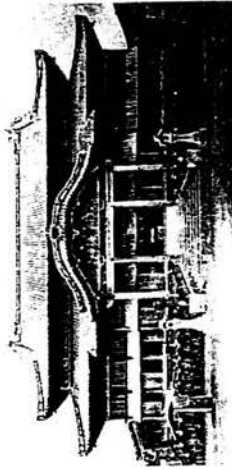


手水舎 右灯笼 養鉄植 大龍柱 (向き合う)

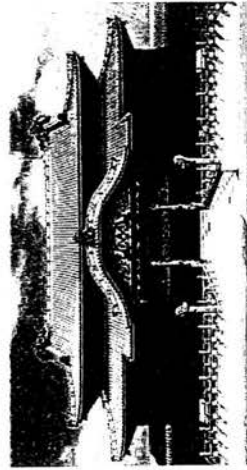
大龍柱の向き
昭和の解体修理後に、沖繩神社拝殿として位置つけられたことにより、大
龍柱の向きを戻らせる必要になっている。



明治末期の首里城正殿



昭和の解体修理後に、沖繩神社拝殿として位置つけられた当時の首里城正殿



平成4年に復元された首里城正殿

20TH
ANNIVERSARY



沖縄県立埋蔵文化財センター

休所日 月曜日（国民の休日・慰霊の日にあたる場合は振替）、
国民の休日（こどもの日・文化の日を除く）、
年末年始（12/28～1/4）、慰霊の日（6/23）
※その他臨時休所あり

開所時間 9：00～17：00
（入所は16：30まで）

住所 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

電話番号 ☎ 098-835-8752

新型コロナウイルス感染予防に
ご協力お願い致します。
詳細は当センターホームページで。

🔍 沖縄県立埋蔵文化財センター

